

10月22日ウェブサイト掲載

商品貨幣論の再構成

2021年10月23日

東京経済大学学術フォーラム

「マルクス経済学の現代的スタンダードを語る」

結城 剛志

埼玉大学大学院人文社会科学研究所

問題関心

- 現代の貨幣を射程に収める貨幣論は構想できるか？
- これまでのマルクス経済学はどのように貨幣を説明してきたか
- これからのマルクス経済学はどのように貨幣を捉えるべきか？

教科書

- さくら原論研究会『これからの経済原論』 ぱる出版、2019年
- 書評
 - 瀬尾崇『季刊経済理論』第57巻第3号、2020年
 - 結城剛志「『これからの経済原論』にたいする瀬尾崇氏へのリプライ」『季刊経済理論』第58巻第2号、2021年

目次

1. 現代資本主義の特徴
2. マルクスの貨幣論
3. 信用貨幣の捉え方
4. 商品貨幣論の再構成

④商品貨幣論の再構成

「貨幣は、商品に内在しているが視覚的に認識できない価値が目に見えるかたちで表に現れたものであり、価格は貨幣で表現された商品の価値の大きさである。商品の価値をベースに貨幣を説明する理論を**商品貨幣説**という」(さくら原論22頁)。


- この商品貨幣をベースに信用貨幣を説明する。

変容論アプローチ

理論レベル	概念の展開				
貨幣形態		金貨幣 兌換銀行券	預金通貨 不換銀行券		
変容論		物品貨幣	信用貨幣		開口部 外的条件の作用 ポイント
原理論	商品	貨幣 (= 商品貨幣)		資本	
	使用価値 価値	使用価値	価値	商業資本 銀行業資本	

2021/10/23

資産	負債
金融資産（商品）の価値	銀行券 預金 <div style="border: 1px solid red; padding: 5px; display: inline-block; margin-top: 10px;">信用貨幣</div>



2021/10/23

- 3 商品価値ベースの信用貨幣
- 債権債務関係の中で信用貨幣が創造される。
 - ただし、信用創造される量は、商品の価値量に限界づけられる。
- 返済還流、商品販売の确实性
 - 貨幣は物品貨幣のみ、信用貨幣のみの**2パターン**。
 - 物品貨幣に基礎づけられて、信用貨幣が現れる二階建て構造をやめる。
- 不換銀行券**制度**
 - 銀行券の無期債務化
 - 兌換請求が行われない景気循環の安定性が確保された特殊な状態に現れる。

- 信用貨幣と不換制の両面を併せ持つ現代貨幣が資本主義に生成される**契機**を原理論の内部に明示し、商品の素材や使用価値から説明する単純商品貨幣説とは区別された、**価値から説明するマルクス派の商品貨幣説を再生する。**
 - 物品貨幣と信用貨幣は「単純な商品流通」の理論レベルで並び立つ。
 - 商品 → 金貨幣 → 信用貨幣 といかないようにするためには？
 - **商品概念**の再確認が必要。

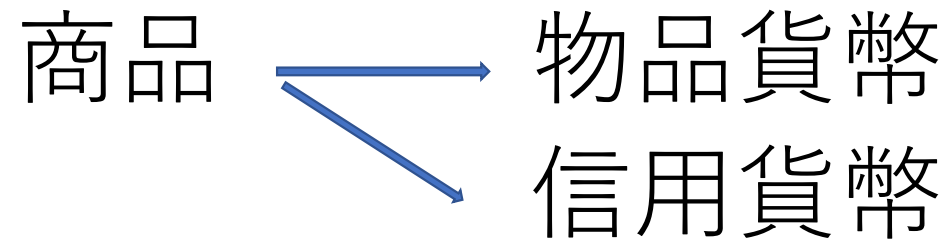
マルクスの金貨幣論の一面性

- 商品を、使用価値と価値の二要因で概念化し、価値表現の発展を追跡する価値形態論を展開したにもかかわらず、商品の価値の大きさに統一的な表現を与える一般的価値形態の位置には金が収まると結論づけた。
- 金になる理由は、歴史的・制度的・文化的要因、突き詰めると「最も適した使用価値を有する商品に帰着する」（宇野）として、使用価値論に傾斜した説明となった。
- マルクス貨幣論の複雑な論証過程にもかかわらず、結論から見ると物々交換において任意の財を貨幣とみなす**財貨幣論**と変わるところがない。これでは**商品貨幣論**とはいえない。

用語

- 商品貨幣 ≠ 物品貨幣
- 商品貨幣 ≠ 金貨幣
- 商品経済 ≠ 物々交換

☆ 用語を分けるためには、概念を整理しなければならない。



- ☆ 特定の制度、歴史的事例にとらわれない、
より抽象的な基準を示す

前提条件

- 対象：**資本主義**
 - 同種商品の大量性
 - 商品の複数性
 - 主体の複数性
 - 利得追求
- 『資本論』解釈において**論証されていることと想定されていること**，また**論証すべきこと**とが明確に区別されていなかったことが問題を複雑にしてきた。
 - 商品経済的論理が及ぼす影響の範囲を特定する。
 - 制度的な要因（兌換，不換，商品体の選定）は説明しない。
 - 制度に働く力を分析する。

再構成された価値形態論

- 主体は**資産**としての商品ストックを有する。
- 商品は**売り物**，売る以外に使い道がない。

- 貨幣のない商品経済の困難
 - 価値表現
 - 主体が所有する商品の価値の大きさがわからない
 - 交換要求
 - 主体が欲する商品を獲得する手段の欠如

暫定的な結論

- 貨幣形態 → 外的条件
- 物品貨幣 → 兌換券 → 単種商品の価値に対する債務
- 信用貨幣 → 単種商品とは兌換できない → 資産（合成商品）の価値に対する債務

簡単な価値形態

- 価値表現

- 小麦10tの価値量は鉄1tの量に等しい。
- 価値形態論の展開から一般的価値形態を導く通説通りのルートがある。

$$A : \text{小麦10t} = \text{鉄1t}$$

- 交換を求める形態

- 1tの鉄を欲するAは資産として有する商品の中から小麦10tを差し出す。
- 1tの鉄が不動なのに対して、相対的価値形態に置かれる商品には任意性がある。

$$A : \text{小麦10t} \rightarrow \text{1tの鉄}$$

間接交換を求める形態

- Aは1tの鉄を欲する。
 - 200頭の豚、30tの砂糖は鉄を獲得する手段となる。

A：小麦10t → **1tの鉄**

B：鉄1t → 200頭の豚

C：豚200頭 → 30tの砂糖

☆ 間接交換の媒介物の任意性

拡大された価値形態

A : 小麦10kg = 1kgの鉄
= 鉄1kg
= 豚200頭の現物（使用価値）
= 豚200頭の価値の債務証書

☆ 間接交換の媒介物の任意性から、
価値請求権としての信用貨幣が取り出せる。

☆ 単種商品ベースの信用貨幣論

評価を求める形態

A : 小麦90t =

A : 合成樹脂4t =

A : (小麦2t, 合成樹脂3.2t) =

複数商品による価値表現

A：小麦10t→**1tの鉄**

B：鉄1t→200頭の豚

C：(豚200頭，天然ゴム200kg) →60tの砂糖

☆ 主体の資産、欲求の指向性、
相対的価値形態の任意性から、
複数商品による価値表現が現れる。

複数商品による価値表現

- C：証券→60tの砂糖
 - (豚200頭, 天然ゴム200kg) = 証券
 - 豚, 天然ゴムと天然ゴムの代理物の場合、証券バスケットの構成（比率）は組み替えられない。
 - 証券バスケットの価値量に対する請求権の場合、価値量を安定させるために、証券バスケットの構成は組み替えた方がよい。
 - 間接交換の媒介物の任意性から、証券バスケットの使用価値が不問にされる場合、この証券が求められる可能性がある。

- A：小麦10t = 3単位の証券
 - ここで、証券は、複数種の商品の価値に対する請求権になっているため、特定の商品を引き出すことができない。
 - 小麦の価値の大きさを表す。
 - 間接交換の媒介物。
 - 商品の価値をベースにした商品貨幣であり、かつ、商品の価値に対する請求権としての信用貨幣。
 - ただし、複数種の商品のバスケットの価値に対する請求権としての証券が等価形態に置かれるための条件が多い。したがって、物品貨幣（～金貨幣）に分岐する可能性を排除しない。

資産	負債
単種商品の価値	債務証券
複数種商品の価値	信用貨幣

- 3 商品価値ベースの信用貨幣
 - 単種商品の価値ベースの信用貨幣
 - 複数種商品の価値ベースの信用貨幣
 - いずれも単純な商品流通、価値形態論の理論レベルから導ける。
 - 債務証券が銀行券等の具体的な形態をとるためには、
 - 信用貨幣の発行主体が資本
 - 資産価値の安定性を利潤追求に結びつける
 - 商業信用ベースの金融債権の集中
 - 銀行間組織の形成

①現代資本主義の特徴

- 国際通貨制度の転換
 - 信用貨幣は、貨幣商品・金との関係を裁ち、銀行券は兌換銀行券から**不換**銀行券へ。預金通貨も金を引き出せない。
- 国家独占資本主義
 - 管理通貨制度、裁量的な財政金融政策の展開
- 純粹資本主義からの離脱
 - 国際金本位制、自由競争的な市場経済、小さな政府

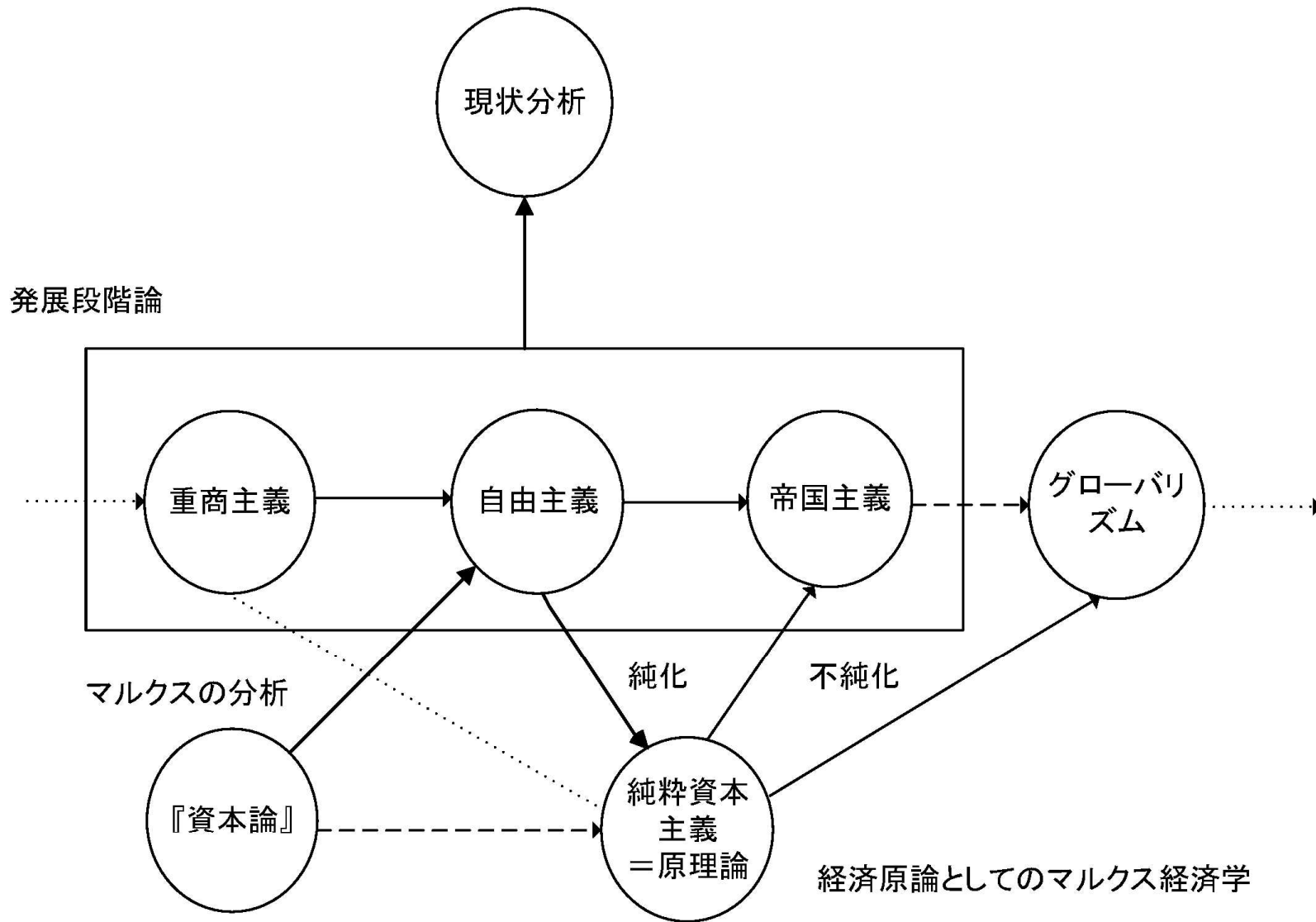
現代資本主義の特徴

- 不純化した資本主義

- 福祉国家、社会民主主義、にじり寄る社会主義
- 貨幣（銀行券、預金通貨、鑄貨）への信用が金との兌換によって支えられていた時代が終わり、金の国際的な支払手段としての役割も低下した。

- 不純化した資本主義における、金との関連が説明できない貨幣はどのように説明することができるのか？

- できる/できない
- 貨幣/非貨幣
 - 現代資本主義は資本主義の純粋な状態から遠く隔たった地点にまできてしまった。
 - マルクス経済学の貨幣論は現代資本主義の分析の役に立たない。
 - 資本主義の動態分析に大きな役割を果たしてきた貨幣論の皮相的な顛末に疑問を感じてしまう。



現代の貨幣論への不満

- 現代の貨幣を体系的に説明できる貨幣論がない。
- さまざまな貨幣論が乱立していて貨幣の統一的な理解が妨げられている。
- もちろん、マルクス貨幣論も諸理論の中に含まれる。
 - マルクス貨幣論を**商品貨幣論の観点から**再構成し、原理論に位置づけ直す必要がある。
 - 商品貨幣論の観点から、資本主義の歴史的発展を理論的に捉え直す。

- 現代の貨幣を射程に収める貨幣論を展望する。
- そのための鍵は**マルクスの商品貨幣論**にある。

- しかし商品貨幣論の分が悪い。
 - それにもかかわらず、なぜいま商品貨幣論を問い直さなければならぬのだろうか？

②マルクスの貨幣論

- いずれかの商品が貨幣になる論理的可能性を示す。
- 貨幣商品が金に帰着することを示す。

『資本論』の説明

「しかし、いまここでなされなければならないことは、ブルジョア経済学によってただ試みられたことさえないこと、すなわち、この**貨幣形態の生成**を示すことであり、したがって、**諸商品の価値関係に含まれている価値表現の発展**をその最も単純な最も目立たない姿から光りまばゆい貨幣形態に至るまで追跡することである。これによって同時に**貨幣の謎**も消え去るのである。」(Marx [1962], p.62; 93-94頁)

価値形態論

- 「一般的価値形態は価値一般の一つの形態である。だから、それは**どの商品にでも**付着することができる」(Marx [1962], p. 83; 130頁)
 - 価値表現の発展を追跡していくと、**どの商品も**が商品の価値の大きさを一般的に表現する媒体になりうる**論理的な可能性**があることがわかる。
- 「**金**の**第一の機能**は、商品世界にその**価値表現の材料**を提供すること」(Marx [1962], p. 109; 171頁)
 - 商品の価値の大きさを貨幣の量で表現する、そのための統一的な媒体。価値尺度。

金貨幣になる理由

- 歴史的・慣習的な選択
- 理論的な前提（仮定）
- 価値実現論
- 市場の外来性
- 世界貨幣

- マルクスの貨幣論は、
- 「価値表現の発展」（論理的・原理的展開）
 - どの商品が貨幣商品に選択されるか、論理的には決まらない。
- 歴史・制度・慣習・素材・使用価値
 - 貨幣商品が金に落ち着く



- 後者の結論だけ採るとマルクス貨幣論 = 金貨幣論となる。
 - 金貨幣論は、なんらかの品物が貨幣になることを論じる商品貨幣論のマイナーバージョンに過ぎないことになる。
- これでは、商品論において、**商品と財を区別**した甲斐がない。
 - マルクスの資本主義分析が商品分析から始まる以上、**商品概念**にもっとこだわる必要がある。

- マルクスの金貨幣論は自明のものとして受容される。
 - 「それと同時にまた当然のことであるが、一般的等価物は等価物商品として**最も適した使用価値を有する商品に帰着することになる**。金、銀が、そして結局**金が**、かかる一般的等価物として固定され、**貨幣となる**のである。」（宇野弘蔵『経済原論』36頁）
 - 現代資本主義を射程に含む貨幣論が展望できない。
 - マルクス金貨幣論の射程の短さに疑問をもつ研究者が増えた。
 - このような疑問は、必ずしも貨幣論研究そのものから出てきたわけではなく、むしろ**信用論研究の蓄積**の中から出てきた。

③信用貨幣の捉え方

- 信用貨幣の捉え方
- 1 金兌換ベースの信用貨幣
- 2 返済還流ベースの信用貨幣
 - 兌換準備金の消極化
- 3 商品価値ベースの信用貨幣
 - 兌換停止の無期化

資産	負債
金	銀行券
金融資産	預金
	資本

2021/10/23

- 1 金兌換ベースの信用貨幣
- 銀行券は銀行の資産の中の金に対する請求権なので、銀行券の価値は、金との交換可能性に支えられている。
 - 金の使用価値・素材
 - 金の価値
 - 支えられ方は二重。

1 不換紙幣論

- 「われわれが**債権・債務**というばあい、その内容はとうぜん価値請求権 = 貨幣請求権・価値(貨幣)の支払約束ということではなければならない。そして銀行券のばあいは、金請求権・金支払約束ということではなければならない。☆不換銀行券は兌換の停止によってこのような金債務がなくなったのだから、われわれは不換銀行券には、もはやなんらの債務性しただがって手形性もなく、それはつまりは**不換紙幣**に転化してしまったのだと説くのである。」
 - 麓健一 [1967] 『不換銀行券論』 青木書店(28頁、強調は引用者による)

資産	負債
金	銀行券
金融資産	<div style="border: 1px solid red; padding: 5px; display: inline-block;">不換紙幣</div>
	預金
	資本

←-----→

2021/10/23

- 1 金兌換の論理に着目した解釈
- 金兌換がなくなると、
 - 資産（金）と債務（銀行券）が無関係になる
 - 金の価値の裏付けを失う
 - 金を媒介にした商品経済との関連性を失う
 - × 金貨幣
 - × 商品貨幣
 - × 信用貨幣
- **不換紙幣論**が妥当となる。
 - しかし、無価値な不換紙幣が流通するのはなぜか？ という新たな問題が生じる。

不換紙幣論の問題点

- 金貨幣（金兌換）ベースの信用貨幣を考えると、金兌換が停止された以降の貨幣は**不換紙幣**となる。
 - **価値論**との関係がなくなる。
 - 商品経済や社会的再生産との関連が説明できなくなる。
 - 貨幣の供給量のみの問題となり、貨幣数量説に近づく。
 - 貨幣価値の問題
 - **国家紙幣論**に理論的な根拠を与える。
 - 法貨規定、強制通用力
 - 貨幣は経済学の考察対象から離れる。
 - 不換紙幣、国家紙幣は、商品貨幣論の論理から展開できない。
 - マルクス貨幣論が不要になり、貨幣論のないマルクス経済学の役割も低下する。

資産	負債
金	銀行券
金融資産	信用貨幣
	預金
	資本

2021/10/23

- 2 返済還流ベースの信用貨幣
- 商業手形の割引等によって銀行券を貸し付け、返済によって銀行券が還流する。
 - 好況期は返済還流が安定するので、兌換は請求されない。
 - 兌換請求は、恐慌期のような特定の時期に限られる。
 - 銀行券の価値は金のみで支えられているのではなく、資産全体で支えている。
 - 金準備の役割の消極化


2 「銀行手形ないし銀行券の流通性・・・、あるいは銀行の支払能力は、直接的には銀行の資本の一部を構成する支払準備金によって支えられているとあってよい。銀行券の支払のことをとくに**兌換**といい、そのための準備のことを**兌換準備金**という。この支払準備は、しかし、銀行の支払能力にとって必ずしも実質的な基礎をなすわけではない。銀行はその専門的な情報収集活動にもとづいて広範な産業資本ないし商業資本の中から支払能力が確実に信用しうる諸資本の手形を選別し、それらの諸資本の手形を集中代位することによって、それらの諸資本による円滑な返済を銀行の手もとに集中・集積しているのであり、**銀行の債務にたいする支払能力の実質的な基礎**はここにあるのである。」（山口重克『経済原論講義』227頁）

- 割引・貸付によって信用貨幣が創造され、返済によって信用貨幣が消滅する。
- 信用貨幣の研究が進み、不換制度が長期に安定するようになると、金貨幣を当然の前提とする貨幣論に疑問が沸くようになる。しかし、金貨幣の消極化＝商品貨幣の消極化と考えるのはいきすぎ。

信用貨幣論

- もう一つの金貨幣論批判の行き方もある。
 - 2の論理（返済還流）を突き詰めると、金兌換はそもそも不要となる。
- 吉田暁 [2008] 「内生的貨幣供給論と信用創造」 『季刊経済理論』 第45巻第2号, 15-25頁

資産	負債
金融資産	銀行券 預金 <div data-bbox="904 619 992 1102" style="border: 1px solid red; padding: 2px; display: inline-block; vertical-align: middle;">信用貨幣</div> 資本



2021/10/23

- 2' 預金設定による貸付によって、信用貨幣が創造され、返済によって信用貨幣が消滅する。
- 返済還流の確実性（大量の不渡りを出さない）だけが必要。
- **貨幣は信用貨幣のみ。**
 - 金貨幣は始めからない。

金債務

- 「信用貨幣を銀行の一覧払い債務としながらも、信用関係の中で発生・消滅という性質を中心とする定義には異論が多い。例えば『大月金融辞典』での『信用貨幣』……は『貨幣支払の債務証書が、貨幣に代わってその支払手段機能に基づいて流通することである』と、本来の貨幣（金）の返済約束を中心に置いて規定している」（吉田 [2008] 15頁）。
 - 金貨幣を前提とすると、
 - 信用貨幣は、貨幣支払の債務証書、本来の貨幣は金なので、金債務、金としての貨幣請求権となる。

問題意識

- 金本位制から長期間離脱し続けている現実を踏まえて「貨幣・信用に関しても、**現在の中央銀行券・中央銀行預金，銀行預金……というシステムを前提に理論化を図るべきではないであろうか**」（吉田 [2008] 16頁）と提起される。
- そのように理論化することはもちろん可能であろうが，経済学を一時代の特殊理論とすることへの危惧がないわけではない。
 - 「**現在の中央銀行券・中央銀行預金，銀行預金…というシステム**」は，被説明対象。
 - さくら原論「第3篇 機構論」

問題意識

- 現代的な信用システムを前提して理論化した場合、**貨幣の原理的な作動と制度によって変化させられる関係**とが不明確になることはないだろうか。
 - 「資本主義の異質化」の原理と「兌換の停止」という制度変化とを切り分け、「金本位制から離脱して80年近く、19世紀のそれからは異質化したといっても**資本主義でなくなったわけではない**」（吉田 [2008]）との認識と整合的な原理を、**マルクス貨幣論の論理に即して再構成**する。

- 「**貸借関係から貨幣が生まれてくる**ことがあるのは確かであるし、現代の不換日銀券もその延長線上にある**信用機構の創出した貨幣**であることも確かであるが、しかし、貸借関係は貨幣の貸借関係であるから、**貸借関係に先行する貨幣概念をまず想定せざるを得ないではないか**と思われる。貨幣とは何かという場合、それは貨幣の貸借関係から生まれたものだというと、これも**永遠の循環論**になってしまう。」（山口 [2008] 84-85頁）
 - 債権債務関係から信用貨幣を説明する純粹信用論は「永遠の循環論」（トートロジー）になる。
 - 原因と結果、因果関係を説明するのが理論だとすると、吉田の説明にも納得ができない。
 - × 金貨幣、不換紙幣・国家紙幣、貨幣論のない信用論
 - どれも納得のいく説明となっていないが、マルクス貨幣論に対する**大きな問題提起**ともなっている。同時に、手が限られてきている。
 - 商品貨幣論の出発点に立ち返って考える。

資産	負債
金の価値	銀行券
金融資産の価値	預金
	資本

信用貨幣

←→

2021/10/23

- 3 商品価値ベースの信用貨幣
- 返済還流が確実なら、兌換は請求されない。
- 金は資産の一部に消極化される。
- 兌換停止の制度化・無期化
 - 不換銀行券制度
- しかし、銀行券と預金は相変わらず銀行の負債なので、銀行の資産価値に対する請求権である。この債務が請求されない状態を維持しなければならない。
 - 国家独占資本主義以降の体制の歴史的役割
 - 金貨幣論では分析できない

現代資本主義の貨幣研究

- 段階論的アプローチ
 - 現代の貨幣は金貨幣論から見ると貨幣ではない。
- 信用論的アプローチ
 - 返済還流に着目すると、支払準備金の役割は限りなく小さくなる。
 - 貨幣と何か？ があらためて問われるようになった。
- 貨幣論的アプローチ
 - 貨幣は、物品貨幣と信用貨幣の二方向に分岐する。
 - 商品の二要因にこだわる。
 - 貨幣形態が論理的に定まらないことの意味を再考する。
 - 外的条件が作用するポイント（開口部）を明示する。
 - 一つの対象に向かって3方向から攻めている。3つのアプローチが出会うポイントの特定が今後の研究課題。

主な参考文献

- 泉正樹 [2019] 「商品貨幣論の現代的展開」『季刊経済理論』第55巻第4号, 7-17頁
- 小幡道昭 [2009] 『経済原論：基礎と演習』東京大学出版会
- 小幡道昭 [2012] 『マルクス経済学方法論批判—変容論的アプローチ』御茶の水書房
- 小幡道昭 [2013] 『価値論批判』弘文堂
- 江原慶「価値形態論における計算貨幣」『季刊経済理論』54巻4号、2018年、55-67頁
- さくら原論研究会『これからの経済原論』ぱる出版、2019年
- 山口重克 [2006] 「電子マネーの貨幣論的考察」, 木立真直・辰馬信男編著『流通の理論・歴史・現状分析』中央大学出版部
- 山口重克 [2008] 『現実経済論の諸問題』御茶の水書房
- 吉田暁 [2008] 「内生的貨幣供給論と信用創造」『季刊経済理論』第45巻第2号, 15-25頁
- SGCIME編『マルクス経済学 市場理論の構造と転回』桜井書店、2021年
- Marx, K. [1962] *Das Kapital, Karl Marx, Friedrich Engels Werke*, Band 23, Berlin: Dietz Verlag.
- Schumpeter, J. A. [1994] *History of Economic Analysis*; Edited from Manuscript by Elizabeth Boody Schumpeter; and with an Introduction by Mark Perlman, London: Routledge.
- Smith, A. [1981] *An Inquiry into the Nature and Causes of the Wealth of Nations*; General Editors, Campbell, R.H. and Skinner, A.S.; Textual Editor, Todd, W.B., Indianapolis: Liberty Fund.